
原著論文

通信教育課程で学ぶ社会人学生の
セルフ・ハンディキャッピング緩和モデルの検討

中村 康則^a, 向後 千春^b

Exploring a Reduction Model of Self-Handicapping
in Adult Students Learning Through Correspondence Courses

Yasunori Nakamura^a, Chiharu Kogo^b

(Graduate School of Human Sciences, Waseda University^a

Faculty of Human Sciences, Waseda University^b)

(Received : April 02, 2020; Accepted: September 02, 2020)

Abstract

This study aimed to reduce self-handicapping (SHC) in adult students taking correspondence courses. To do so, we examined a model for mitigating SHC in which self-reflection mediates hardiness, which leads to alleviation of SHC. Structural equation modeling revealed two sequence paths. In the first, the self-reflection dimensions of “looking squarely at negative aspects of oneself” and “opportunities to reflect on oneself” mediate “commitment,” a dimension of hardiness, which in turn weakens the SHC characteristics of “lack of time” and “poor physical condition.” In the second, the “opportunities to reflect on oneself” dimension of self-reflection mediates the “challenge” aspect of hardiness, which then weakens the SHC characteristics “lack of time,” “poor physical condition,” and “aging.” At the same time, the self-reflection dimension “degree of reflection” was not correlated with hardiness, nor was a correlation found between the hardiness dimension “control” and SHC. The results of this study suggest that the self-reflection dimensions “looking squarely at negative aspects of oneself” and “opportunities to reflect on oneself” as well as the hardiness dimensions “commitment” and “challenge” may play a vital role in reducing the characteristics of SHC.

Key Words : adult students, self-handicapping, causal modeling, self-reflection, hardiness

1. はじめに

1.1 セルフ・ハンディキャッピングとは

セルフ・ハンディキャッピング (以下, SHC) とは,

失敗の要因を外在化し, 成功の要因を内在化する機会を増やすための行為, または能力の調整と定義される (Berglas & Jones, 1978)。また, SHCは,

^a 早稲田大学大学院人間科学研究科 (Graduate School of Human Sciences, Waseda University)

^b 早稲田大学人間科学学術院 (Faculty of Human Sciences, Waseda University)

結果が明らかになる前に、自分の行動や周囲の環境を整えておくといった先制的な言い訳行為とも定義される(伊藤, 1991)。SHCは自分の何らかの特性が評価の対象となる可能性があり、かつ、そこで高い評価を受けられるかどうか確信がもてない場合に生じる(安藤, 1990)。そのため、SHCは学習場面において生じることが多い。なぜなら、学習場面は自己の能力や知性に関する情報が公開されやすい状況下にあるからである(Urdan & Midgley, 2001)。

SHCの採用は、自己調整学習において不適切な方略とされ(Garcia, 1995)、SHCを用いることにより、故意に努力をしなくなる、手を出しすぎる、成功するには間に合わなくなるまで遅らせるなどの弊害が生じる(Schunk & Zimmerman, 1998)。SHCの方略を採りやすい学生は、そうでない学生にくらべ成績が悪く(Urdan & Midgley, 2001)、また、SHCの方略を採った場合は、SHC採用者に対する他者からの能力評定と好意が低下することが判明している(Smith & Strube, 1991)。

1.2 社会人学生とSHC

社会人学生は、高校卒業後すぐに大学に入学する学生とくらべ、学習の継続に影響するさまざまなハンディキャップを抱えている(中村, 2018)。そのハンディキャップには、時間不足、体調不良、老化などを挙げることができる。社会人学生は生活者であるために、学業のほかに仕事、家事、育児も行わなければならない、時間不足を強く認識する(e.g., 関・富永・向後, 2014; 鈴木・向後, 2016)。また、出相(2009)が述べるとおり、社会人学生は年を取るにつれて健康に悩みや不安を感じる者が多くなり、良好な健康状態を数年にわたって維持し、最後まで授業に出席し続ける自信を持ってない者もいる。さらに、魚住・近藤・野田(2015)は、社会人学生の思いとして「若いときのようにはいかない、記憶力が悪いし柔軟な発想ができない」といった老化による学習の困難さについて言及している。このように、社会人学生にはハンディキャップが存在するため、学習がうまく遂行できない要因をハンディキャップに帰属させやすい状況下にあると考えられる。社会人学生が不適切な学習方略とされるSHCの特性が強まれば、SHCの弊害により、学習の継続がより一層困難なものになってしまう。

社会人学生のSHCを測定する尺度としては、中

村・向後(2019)が開発した「通信教育課程で学ぶ社会人学生のためのSHC尺度(以下、SHS-ASCC)」が存在する。SHS-ASCCでは、先に述べた社会人学生の学習継続上のハンディキャップとなる「時間不足」「体調不良」「老化」に対応したSHCの強度を測定することができる。また、SHS-ASCCを用いた研究では、社会人学生が「時間不足」「体調不良」「老化」のハンディキャップを統制不能なSHCとして捉えていることが判明している(中村・向後, 2019)。統制不能なSHCとは、自分で統制できない状況・状態の結果という認知に基づくSHCであり、たとえ所期の目的に向かって行動しようと思っても、統制不能なんらかの障害があるため行動できないと認知した結果生じるSHCのことである(沼崎・小口, 1990)。沼崎・小口(1990)は、統制不能なSHCは短期的には自尊感情を防衛できるが、不適切な遂行を是正することにはならないため、長期的には自尊感情の低下を招く可能性があるとしている。そのため、社会人学生の学習を継続させるためには、統制不能と捉えているSHCの特性を緩和させる必要がある。

なお、本稿では、社会人学生の定義を「高校や大学などの教育課程を終えてから、専業学生以外の身分で、実社会に参加した経験をもつ高等教育機関に在籍する学生」とする。この定義は岩永(2008)に基づくものである。

1.3 社会人学生のSHCと関連する概念

社会人学生のSHCの特性を緩和するためにはどうすればよいのであろうか。本研究では、SHCと関連する概念として、ハーディネス、および、自己内省に着目する。

ハーディネス ハーディネスとは「ストレスに満ちた出来事に遭遇した場合、ストレス耐性の資源として機能する性格特性」と定義され、「コミットメント」「コントロール」「チャレンジ」の3概念で構成される(Kobasa, Maddi, & Kahn, 1982)。「コミットメント」は人生のさまざまな状況に対して自分を十分に関与させる傾向である(多田・濱野, 2003)。「コントロール」は個人が出来事の推移に対し一定の範囲内で影響を及ぼすことができると信じ、かつ、そのように行動する傾向である(多田・濱野, 2003)。「チャレンジ」は、安定性よりもむしろ変化が人生の標準であり、成長の機会であると捉え

る傾向である (多田・濱野, 2003)。高等教育の場においては、ハーディネスが大学への定着に重要であることが判明しており、大学能力評価試験 (SAT) スコアや高校時代の成績よりも優れた定着予測因子となっている (Lifton, Seay, & Bushko, 2000)。

ハーディネスは、ストレスが認識された後のストレスの対処法にも影響を与える (Sansone, Wiebe, & Morgan, 1999)。Maddi (1999) は、ハーディネスの対処について、ストレスの多い状況を大局的に捉えることで、全くひどい状況だとあきらめてしまうのではなく、何をすべきか明らかにしようとする心理的な技法と捉えており、その結果、問題から回避するのではなく、問題を解決するための行動につながると論じている。また、Maddi & Kobasa (1984) は、ハーディネスを、出来事を自身にとってストレスの少ない形に変える対処法と述べている。実際に、ハーディネスは問題に焦点を合わせた積極的な対処戦略と正の相関があることが示されている (Carver, Scheier, & Weintraub, 1989; Williams, Wiebe, & Smith, 1992)。SHCは、あえて成功の機会を奪うような能力の調整や、失敗を恐れるあまり生じる先制的な言い訳といったように不適切な対処戦略となるため、ハーディネスの特性が強ければ、社会人学生が統制不能と捉えているSHCの特性を緩和できる可能性がある。このため、本稿ではSHCの特性を弱めるものとしてハーディネスを仮定する。

自己内省 自己内省は、知的好奇心によって動機づけられた、自己へ注意を向けやすい特性と定義される (Trapnell & Campbell, 1999)。自己内省は、ストレッサーまたはストレッサーに対する態度を変えることを目的とした自発的な対処、たとえば問題解決や認知の改善 (cognitive restructuring) と正の関連が示されている (Burwell & Shirk, 2007)。中島・服部・丹野 (2015) は、自己内省には物事や自分に対して強い興味や関心があるという特性を持つため、問題に直面した際には、自己内省によって問題に対する関心が高まり、かつ、自己内省によって問題を回避するのではなく解決すべきだという信念が高まると述べている。さらに、自己内省が高い者は、知的好奇心、認知欲求 (need for cognition)、自己知識欲求 (need for self-knowledge) が高く、新しい経験や考え方を好む傾

向にある (Trapnell & Campbell, 1999)。

これら自己内省の特性は、ハーディネスの特性である「ストレスに満ちた出来事に遭遇した場合、ストレス耐性の資源として機能する性格特性 (Kobasa et al., 1982)」を強める可能性がある。実際に、自己内省はハーディネスと正の相関があることが示されている (中島ほか, 2015)。このため、本稿ではハーディネスの特性を強めるものとして自己内省を仮定する。

自己内省の下位概念としては、佐藤・落合 (1995) が「否定性の直視」「対象化」「内省の頻度」の3概念を定義している。「否定性の直視」は、自己のネガティブな部分を直視するかかわり方の程度である。これまでの研究において、「否定性の直視」が弱い者ほど劣等感を強く感じ (高坂, 2009)、自己嫌悪感を抱くことが明らかとなっている (佐藤・落合, 1995)。また、「対象化」は、自己を見つめる水準の深さの程度である。「対象化」の特性が弱い者は、自己の否定性の変容を志向する程度が低い傾向にある (水間, 2003)。最後に「内省の頻度」は、自己を振り返る機会の程度である。「内省の頻度」が高まると自己の否定性に対する変容思考も高まることが明らかとなっている (水間, 2003)。

なお、ハーディネスと自己内省の双方を扱った研究として、中島ほか (2015) は、自己内省がハーディネスを媒介し抑うつを軽減することを示している。かねてより、抑うつ者は自分自身の抑うつ徴候をSHCとして採用する傾向が見られることから (e.g., Baumgardner, 1991)、本研究においても、自己内省がハーディネスの特性を強め、また、ハーディネスがSHCの特性を弱めることが予想される。

1.4 本研究の仮説モデル

これまで述べたとおり、自己内省はハーディネスの特性を強めることが予想され、また、ハーディネスはSHCの特性を弱めることが予想される。そこで本研究では、これらの特性を踏まえ、自己内省がハーディネスを強め、それがSHCを緩和するというモデルを仮定し、検討を行う。

なお、本稿で用いるSHCとしては、SHS-ASCCのうち、「時間不足」「体調不良」「老化」の3概念のみを用いる。SHS-ASCCの下位尺度は、「時間不足」「体調不良」「老化」の他に「能力不足」の下位尺度も存在するが、本研究ではこれを用いな

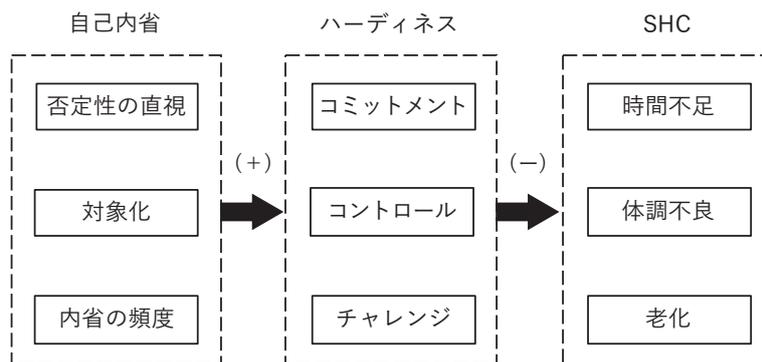


図1 SHC緩和モデル (仮説モデル) (+) は正の関連, (-) は負の関連

い。なぜなら、「能力不足」は失敗の原因を自己の能力に帰属させるものと解釈できるため、Berglas & Jones (1978) が述べるSHCの定義から外れると判断したためである。そこで、本研究で検討するSHC緩和モデルは、自己内省がハーディネスを強め、それがSHCの「時間不足」「体調不良」「老化」を緩和するものとする(図1)。また、その際は、自己内省の3概念(否定性の直視、対象化、内省の頻度)からハーディネスの3概念(コミットメント、コントロール、チャレンジ)に対し、すべての組み合わせとなる9通りのパスを仮定する。同様に、ハーディネスの3概念(コミットメント、コントロール、チャレンジ)からSHCの3概念(時間不足、体調不良、老化)に対しても、すべての組み合わせとなる9通りのパスを仮定する。その上で、構造方程式モデリングを用いて探索的にモデルの検討を行う。

1.5 本研究の目的

これまで述べたとおり、社会人学生が統制不能と捉えているSHCの特性が強まれば、学習の継続がより一層困難となってしまう。そこで本研究では、自己内省とハーディネスの特性を踏まえ、自己内省がハーディネスの特性を強め、それがSHCの特性を緩和する因果モデルを検討する。この検討を通じて、SHCの特性を緩和するための示唆を得ることができれば、通信教育課程で学ぶ社会人学生の学習を継続させるための一助となることが期待できる。

2. 方法

2.1 調査対象と時期

東京都内の四年制大学(通信教育課程)に在籍する社会人学生のうち、2018年4月と10月に開講された基礎必修科目「データリテラシーI」「データリ

テラシーII」の受講生を調査対象とした。調査時期は、科目の成績が発表される前の2018年7月と2019年1月とした。回答者は169人(男性68人、女性101人)であり、男女全体の平均年齢は45.4歳($SD=10.83$, 最年少18歳, 最年長66歳)、男性の平均年齢は45.4歳($SD=9.87$, 最年少20歳, 最年長65歳)、女性の平均年齢は45.5歳($SD=11.49$, 最年少18歳, 最年長66歳)であった。なお、調査時期を2回に分けて実施したが、調査対象者は重複していない。

2.2 手続き

eラーニングシステム上で質問紙調査を告知し協力者を募った。その際は、本稿で定義した社会人学生の範疇から外れる学生には回答しないよう求めた。また、調査への協力が強制ではなく自由意志で実施されること、調査への協力の有無が成績評価に影響しないこと、データは研究終了時に適切に廃棄するなどの倫理的配慮を説明した。その上で、質問紙調査への同意を得た協力者に対し、eラーニングシステム上で質問紙調査を実施した。協力者に対する謝礼は行わなかった。

なお、本研究は早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」の承認を得て実施した(承認番号:2017-293)。

2.3 質問紙

SHS-ASCC 中村・向後(2019)が開発したSHS-ASCC 5件法14項目である。下位尺度は「時間不足」「体調不良」「老化」「能力不足」の4因子で構成される。本研究では、この4因子の中から、SHCの特性を表す「時間不足」「体調不良」「老化」の3因子を用いた。項目例は「時間不足」が“忙しくなければ、教える側の期待に応えられるだろう”“成績が悪いのは時間がないからだと思う”、“体調

不良」が“学習に失敗するのは、体調が悪いからだと思う”“体調が悪くなければ、もっと学習できるのと思う”、“老化”が“若いときの集中力があれば、教える側の期待に応えられるだろう”“若いときの記憶力があれば、もっと成績が良くなるのと思う”などである。また、教示文は「以下の項目は、学習の場面における、あなた自身の考えについて表したものです。それぞれの項目について、あなたにどの程度あてはまるのかをお答えください。その際は、以下の点に注意してください。1) 正しい回答や間違った回答はありません。2) あまり考えこまずに回答してください。3) 周りの人と相談しないで自分の思ったまま回答してください。4) 周りの人の回答を見たりしないでください」とした。この教示文は、沼崎・小口 (1990) が開発したセルフ・ハンディキャッピングスケール日本語版の教示文を援用したものである。

自己内省尺度 佐藤・落合 (1995) が開発した内省に関する尺度を、水間 (2003) が3因子と解釈した自己内省尺度5件法15項目である。下位尺度は「否定性の直視」「対象化」「内省の頻度」の3因子である。項目例は「否定性の直視」が“自分にあるいやな点に気づくとそれ以上考えたくなくなる (逆転項目)”“自分の中のいやなところについては見たくない (逆転項目)”, 「対象化」が“自分についてじっくりと考えることは苦手である (逆転項目)”“自分を見つめてみてもあまり深くは考えられない (逆転項目)”, 「内省の頻度」が“自分のことを反省したり気にやんだりすることはない (逆転項目)”“自分自身について考えることはめったにない (逆転項目)”などである。

ハーディネス尺度 多田・濱野 (2003) が開発したハーディネス尺度を、堀越・堀越 (2008) が一部

改訂し、その信頼性と妥当性を検討したハーディネス尺度5件法15項目である。下位尺度は「コミットメント」「コントロール」「チャレンジ」の3因子である。項目例は「コミットメント」が“自分には打ち込めるものがない (逆転項目)”“学ぶことを本当に楽しみにしている”, 「コントロール」が“どんなことでも最善を尽くせば、最終的にうまくいく”“努力すればどんなことでも自分の力でできる”, 「チャレンジ」が“できればさまざまな経験をしてみたい”“目新しく変化に富んだいろいろなことをしてみたい”などである。

3. 結果

3.1 下位尺度の相関分析

下位尺度間の関連性を検討するため、変数間の相関係数を算出した (表1)。分析にはIBM SPSS Statistics Version 25を用いた。その結果、自己内省とハーディネス間の関連では「否定性の直視」と「コミットメント」($r=.21, p<.01$), 「内省の頻度」と「コミットメント」($r=.22, p<.01$), 「内省の頻度」と「コントロール」($r=.21, p<.01$), 「内省の頻度」と「チャレンジ」($r=.30, p<.01$) に有意な正の相関がみられた。また、「対象化」と「コミットメント」, 「対象化」と「コントロール」に関しては、有意な相関とはならなかったものの、効果量がCohen (1992) の基準で小さな効果量 (small) となる正の相関がみられた (対象化とコミットメント, $r=.12$; 対象化とコントロール, $r=.15$)。

ハーディネスとSHC間の関連では、「コミットメント」と「時間不足」($r=-.27, p<.01$), 「コミットメント」と「体調不良」($r=-.20, p<.01$), 「コミットメント」と「老化」($r=-.16, p<.05$), 「チャレンジ」と「時間不足」($r=-.16, p<.05$), 「チャレンジ」

表1 下位尺度の基本統計量と相関行列

下位尺度	Mean	SD	1	2	3	4	5	6	7	8
1 否定性の直視	3.42	0.57	—							
2 対象化	3.71	0.84	.42**	—						
3 内省の頻度	3.94	0.63	.20**	.23**	—					
4 コミットメント	4.01	0.84	.21**	.12	.22**	—				
5 コントロール	3.58	0.75	.06	.15†	.21**	.33**	—			
6 チャレンジ	4.01	0.90	-.03	.05	.30**	.11	.23**	—		
7 時間不足	2.97	1.02	-.01	.08	-.04	-.27**	-.02	-.16*	—	
8 体調不良	2.22	1.01	-.04	.01	-.08	-.20**	-.15†	-.20**	.43**	—
9 老化	2.64	1.10	.02	.00	-.10	-.16*	-.05	-.33**	.32**	.32**

† $p<.10$ * $p<.05$ ** $p<.01$ 太字は有意性がみられた相関

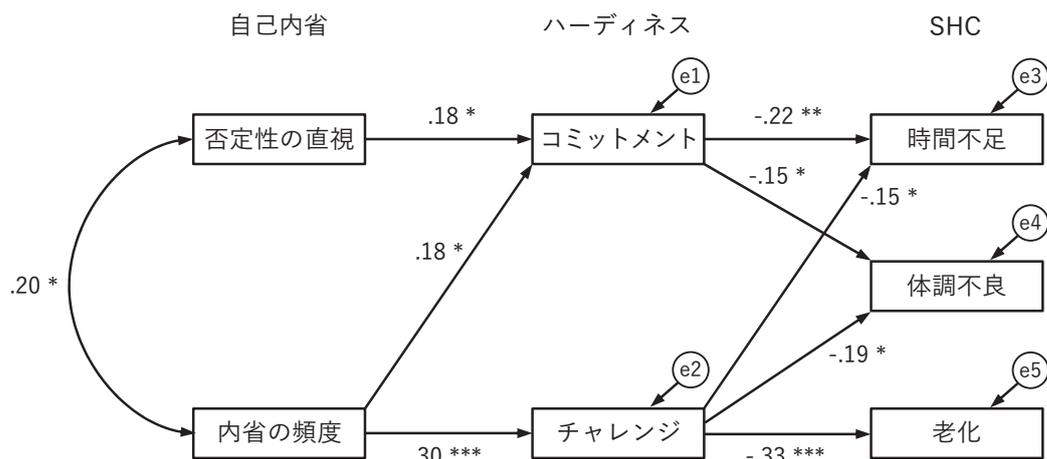


図2 SHC緩和モデル (最終モデル) (数値は標準化解)
 GFI=.990, AGFI=.968, CFI=1.000, RMSEA=.000, AIC=44.191 * $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

と「体調不良」($r=-.20, p<.01$), 「チャレンジ」と「老化」($r=-.33, p<.01$)に有意な負の相関がみられた。また、「コントロール」と「体調不良」に関しては、有意な相関とはならなかったものの、効果量がCohen (1992)の基準で小さな効果量 (small)となる負の相関がみられた ($r=-.15$)。

以上の分析から、自己内省とハーディネス間の関連においては一部に正の相関が認められ、また、ハーディネスとSHC間の関連においても一部に負の相関が認められることが確認された。

3.2 SHC緩和モデルの検討

仮説モデルを検討するため、構造方程式モデリングを実施した。分析にはIBM SPSS Amos Version 25を用いた。はじめに、仮説モデルのとおり、自己内省の3概念からハーディネスの3概念に向けて、すべての組み合わせにパスを設定した。同様に、ハーディネスの3概念からSHCの3概念に対しても、すべてにパスを設定した。また、相関が認められた自己内省3因子間に共分散のパスを設定し、相関が認められたハーディネスの3因子間、およびSHCの3因子間に誤差共分散のパスを設定した。この仮説モデルについて構造方程式モデリングを実施したところ、モデル適合度はGFI=.996, AGFI=.982, CFI=1.000, RMSEA=.000, AIC=74.690となり、豊田 (2007)の基準に鑑みれば許容できるものとなった。しかしながら、この仮説モデルには非有意なパスが複数含まれていたため、それらを順次削除した上で、ハーディネスに寄与しなかった「対象化」と、SHCに寄与しな

かった「コントロール」を削除したところ、図2のSHC緩和モデルが示された。このモデル適合度は、GFI=.990, AGFI=.968, CFI=1.000, RMSEA=.000, AIC=44.191となり、仮説モデルよりはGFI, AGFIが低下したものの、AICが低い結果となったため、より良い適合性を有していると判断された。そのため、図2を最終のモデルとした。なお、図2においては、e3-e4間 ($r=.40, p<.001$), e4-e5間 ($r=.26, p<.01$), e3-e5間 ($r=.27, p<.001$)に誤差相関が設定されているが、表記の煩雑さを避ける目的から記載していない。

以上の分析から、自己内省の「否定性の直視」「内省の頻度」がハーディネスの「コミットメント」に対し正の関連を示し、それが「時間不足」「体調不良」のSHCに対して負の関連を示すことが確認された。くわえて、自己内省の「内省の頻度」がハーディネスの「チャレンジ」に正の関連を示し、それが「時間不足」「体調不良」「老化」に対し負の関連を示すことも確認された。

4. 考察

本研究の目的は、自己内省とハーディネスの特性を踏まえ、自己内省がハーディネスの特性を強め、それがSHCの特性を緩和する因果モデルを検討することであった。構造方程式モデリングの結果、「否定性の直視」「内省の頻度」が「コミットメント」の特性を強め、それが「時間不足」「体調不良」の特性を弱めることが示された。くわえて、「内省の頻度」が「チャレンジ」の特性を強め、それが「時

間不足」「体調不良」「老化」の特性を弱めることも示された。そのため、自己内省がハーディネスを強め、それがSHCを緩和するといった仮説は、概ね支持されたものといえよう。

まず、「否定性の直視」「内省の頻度」が「コミットメント」の特性を強め、それが「時間不足」「体調不良」の特性を弱めるといった一連のパスについて検討する。「否定性の直視」が「コミットメント」に対し正の関連を示した理由は、「否定性の直視」の特性である劣等感や自己嫌悪感を抱きにくいといった特性が、物事に対して自分を十分に関与させ、打ち込み、楽しむといった「コミットメント」の特性にポジティブに関連したためであろう。高坂(2009)は、「否定性の直視」が弱いものほど劣等感を強く感じると述べており、また、佐藤・落合(1995)は、「否定性の直視」の弱いものは、強いものにくらべ、より自己嫌悪感を抱くことを明らかにしている。これを逆に捉えれば、「否定性の直視」の特性が強ければ、劣等感や自己嫌悪感を抱きにくくなるため、物事に対して自分を十分に関与させる余裕が生まれ、打ち込み、楽しむといった「コミットメント」の特性が強まるものと推察する。

「内省の頻度」が「コミットメント」に対し正の関連を示した理由は、内省の頻度が高まると自己の否定性に対する変容思考が高まる(水間, 2003)ためであろう。つまり、「内省の頻度」の特性が強まれば、いやな自分について十分に考え、いやな自分から逃げずに、それを改善したいといった信念が高まる。このような認知の改善による態度の変容(Burwell & Shirk, 2007)は、物事に深く関与したい、打ち込みたい、楽しみたいといった「コミットメント」の特性にポジティブに関連する可能性がある。

「コミットメント」が「時間不足」「体調不良」に負の関連を示した理由は、物事に対して自分を十分に関与させたい、打ち込みたい、楽しみたいといった信念が、「時間不足」「体調不良」といったネガティブな状況を改善したいという思いにつながり、SHCの特性を弱めるものと推察する。これは、物事に打ち込み、楽しみたいといった信念の高まりが、Carver et al. (1989) やWilliams et al. (1992) が述べる問題に焦点を合わせた積極的な対処戦略につながるためであろう。たとえば、「時間不足」に

対する「コミットメント」の対処としては、学習に打ち込む、楽しむためには学習時間が足りないと考え、空き時間を見つけて積極的に学習するなどの対処が考えられる。また、「体調不良」に対する「コミットメント」の対処としては、学習に打ち込む、楽しむためには健康を維持する必要があると考え、学期の間は風邪を引かないよう体調管理に留意するなどの対処が挙げられる。このような対処につながる背景には、「否定性の直視」による劣等感や自己嫌悪感を抱きにくいといった傾向や、「内省の頻度」による自己の否定性を変容したいといった傾向など、自己内省の特性が存在すると考えられる。

つぎに、「内省の頻度」が「チャレンジ」の特性を強め、それが「時間不足」「体調不良」「老化」の特性を弱めるといった一連のパスについて検討する。「内省の頻度」が「チャレンジ」に対し正の関連を示した理由は、内省の頻度が高まると自己の否定性に対する変容思考が高まる(水間, 2003)といった傾向にくわえ、自己内省が高い者は、知的好奇心、認知欲求、自己知識欲求が高く、新しい経験や考え方を好む傾向(Trapnell & Campbell, 1999)によるものと考えられる。いやな自分を見つめ、それを変えたい、また、自分を変えることで成長したいといった信念の高まりは、新しい経験をし、それを成長の機会と捉える「チャレンジ」の特性にポジティブに関連するものと推察する。

「チャレンジ」が「時間不足」「体調不良」「老化」に負の関連を示した理由は、「チャレンジ」の特性である安定よりも変化を好み、変化を成長の機会と捉える特性が、「時間不足」「体調不良」「老化」といったネガティブな状況を成長のきっかけと捉え、それがSHCの特性を弱めるものと推察する。これは、Kobasa & Puccetti (1983) が述べるストレスの多い出来事を成長と発展の機会に回すといったハーディネスの特性を踏まえたものであろう。たとえば、ITスキルの不足している社会人学生は、「時間不足」に対する「チャレンジ」の対処として、eラーニング学習の効率を高めるために、PCやソフトウェアの操作スキルを習得するなどの挑戦が考えられる。また、体力がないため学習継続に自信のない社会人学生は、「体調不良」に対する「チャレンジ」の対処として、スポーツジムに通い健康増進に努めるなどの挑戦が挙げられる。さらに、「老化」に対

する「チャレンジ」の対処としては、老化による注意力、集中力、記憶力などの低下を認めた上で、注意力や集中力を高めるために、現状とは異なった学習環境を整えることや、記憶力の低下を補うために効果的なノートの取り方を学んだり、PCやスマートフォンを活用したりするなどの挑戦が考えられる。このような挑戦的な対処を発見する背景には、「内省の頻度」による自己の否定性を変容したいといった自己内省の特性が関連すると考えられる。

その一方で、本研究においては、「対象化」がハーディネスと有意に関連せず、また、「コントロール」がSHCと有意に関連しないことが示された。水間(2003)によれば、「対象化」の低い者は自己の否定性の変容を志向する程度が低い傾向にあるとされる。しかし、否定性の変容の程度は「内省の頻度」によるものが強いと考えられるため、「対象化」はハーディネスに関連しなかった可能性がある。また、「コントロール」がSHCと関連しない理由は、「コントロール」の特性が、努力はするものの現状の範囲内で対処しようとするものであるため、学習に打ち込むために問題を改善する「コミットメント」や、いやな自分を変化させ、成長のきっかけとする「チャレンジ」の対処にくらべ、SHCの特性を弱めることに寄与しなかったものと推察する。

本研究により、自己内省がハーディネスの特性を強め、それがSHCの特性の緩和に一定の役割を果たすことが示された。しかしながら、社会人学生は、これまでの経験に照らして状況の意味づけをする傾向があり、「大丈夫、私はできるからという気持ちをもっている」「自分が正しいという思いが強い」「自分を曲げられない」といったように、教員の指導に対してふり返りが不十分であるとされる(渡邊・鈴木・常盤, 2012)。そのため、内省することに教員の助言が必要となるなど、自己内省をさせることの難しさが問題となっている(渡邊・鈴木・常盤, 2014)。また、自己の否定的側面を直視するのは苦痛を伴う(e.g., 堤, 1982; 佐藤・落合, 1995)。これらの理由から、SHCを緩和するためには、自己内省の特性を強めることが有益であると考えられるものの、それには困難を伴う可能性がある。したがって、今後は社会人学生の自己内省の特性を強める方略についての検討も必要となるだろう。

5. まとめと今後の課題

本研究では、自己内省がハーディネスを強め、それがSHCを緩和するという因果モデル(SHC緩和モデル)を検討した。成果は以下の3点に集約できる。

- 1) 自己内省の「否定性の直視」「内省の頻度」がハーディネスの「コミットメント」の特性を強め、それが「時間不足」「体調不良」のSHCの特性緩和に寄与する可能性が示唆された。
- 2) 自己内省の「内省の頻度」がハーディネスの「チャレンジ」の特性を強め、それが「時間不足」「体調不良」「老化」のSHCの特性緩和に寄与する可能性も示された。
- 3) 自己内省の「対象化」はハーディネスに関連せず、また、ハーディネスの「コントロール」はSHCに関連しないことが示された。

本研究で明らかとなったSHC緩和モデルを用いることで、通信教育課程で学ぶ社会人学生のSHCに関連する因果構造を把握し、かつ、それを緩和できる可能性が示された。これは、通信教育課程で学ぶ社会人学生の学習を継続させるための一助となるだろう。

なお、本研究の限界としては以下の3点を挙げるができる。1点目は収集したデータの問題である。本研究の結果はあくまで横断調査に基づくものであり、SHC緩和モデルの因果の方向性を十分に検討できていない。そのため、今後は縦断調査を行うことで、因果の方向性を厳密に検討する必要がある。また、本研究では一大学の通信教育課程に在籍する社会人学生を対象としたため、本研究の結果が、すべての社会人学生に当てはまるかどうかについては検討の余地がある。したがって、今後はより幅広い対象へ調査を行い、SHC緩和モデルの検討を継続する必要がある。2点目は社会人学生の属性を考慮できていない問題である。社会人学生は、一般的な学生とくらべ、属性の幅が広い。たとえば、年齢や健康度の幅が広く、既婚・未婚の違い、子どもの有無、介護の有無、職種、役職、勤務時間などの違いが存在する。そのため、本来ならばSHC緩和モデルの検討にこれらの属性を考慮する必要がある。しかしながら、本研究では調査対象者の数が限られていたため、属性の検討までには至っておらず、属性の幅が広い社会人学生の実態を十分に捉えきれていない。したがって、今後は社会人学生の属性に応

じたSHC緩和モデルの検討が必要となる。3点目は、SHCの緩和に有効となる自己内省、ハーディネス以外の概念の存在である。最終モデルは、本研究の趣旨に合致する一連のパスが示されたものの、そのパス係数は決して高いとは言えず、また、誤差共分散も存在することから、背後に別の概念が存在する可能性がある。そのため、今後ともSHC緩和モデルの追究が必要である。

付記

本稿は、日本教育工学会研究会で発表した以下の内容を再分析し、発展させたものである。

中村康則・向後千春 (2018). 社会人学生におけるセルフ・ハンディキャッピングの因果関係の検討 日本教育工学会研究報告集, 18 (5), 193-200.

謝辞

本研究を実施するにあたりご協力いただきました社会人学生の皆様に深謝いたします。

引用文献

安藤清志 (1990). 「自己の姿の表出」の段階 中村陽吉 (編) 「自己過程」の社会心理学 東京大学出版会.

Baumgardner, A. H. (1991). Claiming depressive symptoms as a self-handicap: A protective self-presentation strategy. *Basic and Applied Social Psychology*, **12** (1), 97-113.

Berglas, S. & Jones, E. E. (1978). Drug choice as a self-handicapping strategy in response to noncontingent success. *Journal of Personality and Social Psychology*, **36**(4), 405-417.

Burwell, R. A., & Shirk, S. R. (2007). Subtypes of rumination in adolescence: Associations between brooding, reflection, depressive symptoms, and coping. *Journal of Clinical Child and Adolescent Psychology*, **36** (1), 56-65.

Carver, C. S., Scheier, M. F., & Weintraub, J. K. (1989). Assessing coping strategies: A theoretically based approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, **56** (2),

267-283.

Cohen, J. (1992). A power primer. *Psychological Bulletin*, **112** (1), 155-159.

出相康裕 (2009). 市民大学受講者の大学への入学志願に対する阻害要因—大阪府内における受講者調査から— 大阪教育大学紀要 第IV部門 教育科学, **57** (2), 123-135.

Garcia, T. (1995). The role of motivational strategies in self-regulated learning. *New Directions for Teaching and Learning*, (63), 29-42.

堀越あゆみ・堀越勝 (2008). ハーディネス尺度の構造およびその精神的健康との関連—中高校と大学生を対象として— 順天堂医学, **54** (2), 192-199.

伊藤忠弘 (1991). セルフ・ハンディキャッピングの研究動向 東京大学教育学部紀要, **31**, 153-162.

岩永雅也 (2008). 放送大学と社会人学生 IDE-現代の高等教育, IDE大学協会, (502), 35-40.

Kobasa, S. C., Maddi, S. R., & Kahn, S. (1982). Hardiness and health: a prospective study. *Journal of Personality and Social Psychology*, **42** (1), 168-177.

Kobasa, S. C., & Puccetti, M. C. (1983). Personality and social resources in stress resistance. *Journal of Personality and Social Psychology*, **45** (4), 839-850.

Lifton, D. E., Seay, S., & Bushko, A. (2000). Can student "hardiness" serve as an indicator of likely persistence to graduation? Baseline results from a longitudinal study. *Academic Exchange Quarterly*, **4** (2), 73-81.

Maddi, S. R. (1999). Comments on trends in hardiness research and theorizing. *Consulting Psychology Journal: Practice and Research*, **51** (2), 67-71.

Maddi, S. R., & Kobasa, S. C. (1984). *The hardy executive: Health under stress*. Dow Jones-Irwin.

水間玲子 (2003). 自己嫌悪感と自己形成の関係について 教育心理学研究, **51** (1), 43-53.

中島実穂・服部陽介・丹野義彦 (2015). ハーディネスを媒介して自己内省が抑うつに与える影響 心理学研究, **86** (4), 347-353.

- 中村康則 (2018). 非伝統的学生の学業継続に影響する
阻害要因についての文献的考察 日本生涯教育学
会年報, (39), 213-229.
- 中村康則・向後千春 (2019). 通信教育課程で学ぶ社会
人学生のためのセルフ・ハンディキャッピング尺
度 (SHS-ASCC) の開発 日本教育工学会論文誌,
42 (4), 355-367.
- 沼崎誠・小口孝司 (1990). 大学生のセルフ・ハンディ
キャッピングの2次元 社会心理学研究, 5 (1),
1-12.
- Sansone, C., Wiebe, D. J., & Morgan, C. (1999).
Self-regulating interest: The moderating role
of hardiness and conscientiousness. *Journal
of Personality*, 67 (4), 701-733.
- 佐藤有耕・落合良行 (1995). 大学生の自己嫌悪感に関
連する内省の特徴 筑波大学心理学研究, (17), 61-
66.
- Schunk, D. H. & Zimmerman B. J. (1998). *Self-
regulated Learning: From Teaching to Self-
Reflective Practice*. Guilford Press. (塚野州一
(編訳)・伊藤崇達・中谷素之・秋葉大輔 (訳)
(2007). 自己調整学習の実践 北大路書房) .
- 関和子・富永敦子・向後千春 (2014). オンライン大学
を卒業した社会人学生の回顧と展望に関する調査
日本教育工学会論文誌, 38 (2), 101-112.
- Smith, D. S. & Strube, M. J. (1991). Self-protective
tendencies as moderators of self-
handicapping impressions. *Basic and
Applied Social Psychology*, 12 (1), 63-80.
- 鈴木伸子・向後千春 (2016). オンライン大学での学び
直しを選択した社会人学生の入学時の期待価値と
入学後の努力との関連 日本教育工学会研究報告
集, 16 (1), 425-432.
- 多田志麻子・濱野恵一 (2003). ハーディネス尺度の信
頼性と妥当性の検討 ノートルダム清心大学紀要,
27 (1), 56-62.
- 高坂康雅 (2009). 青年期における内省への取り組み方
の発達的变化と劣等感との関連 青年心理学研究,
21, 83-94.
- 豊田秀樹 (2007). 共分散構造分析 [Amos 編] 一構造
方程式モデリング 東京図書.
- Trapnell, P. D., & Campbell, J. D. (1999). Private
self-consciousness and the five-factor model
of personality: distinguishing rumination
from reflection. *Journal of Personality and
Social Psychology*, 76 (2), 284-304.
- 堤雅雄 (1982). 青年期における自己対象化と存在論的
危機 島根大学教育学部紀要 (人文社会科学), 15,
43-53.
- 魚住郁子・近藤裕子・野田貴代 (2015). 社会人経験の
ある看護学生が学校生活の中で学びつづけていく
プロセス—学びの深化に関わる体験の語りに注目
して 日本看護学教育学会誌, 25 (1), 41-50.
- Urduan, T. & Midgley, C. (2001). Academic self-
handicapping: What we know, what more
there is to learn. *Educational Psychology
Review*, 13 (2), 115-138.
- 渡邊恵・鈴木玲子・常盤文枝 (2012). 看護教員が認識
する社会人経験のある学生の学習者としての特徴
と教育の困難感 日本看護学会論文集 看護教育,
43, 106-109.
- 渡邊恵・鈴木玲子・常盤文枝 (2014). 看護専門学校 (3
年課程) における社会人経験のある学生に対する
教育方法の現状分析 日本看護学教育学会誌, 24
(1), 55-65.
- Williams, P. G., Wiebe, D. J., & Smith, T. W.
(1992). Coping processes as mediators of the
relationship between hardiness and health.
Journal of Behavioral Medicine, 15 (3), 237-
255.